

称号及び氏名	博士（言語文化学） 朴 喜淑
学位授与の日付	平成24年3月31日
論文名	『万葉集』における鳥の表現とその機能
論文審査委員	主査 村田 右富実 副査 田中 宗博 副査 西田 正宏

〈論文要旨〉

本論文は、『万葉集』において、自然の景物として、あるいは恋愛、人事などかかわりながら様々な形で歌われている鳥の歌を、「鳴く鳥の機能（第一章）」、「種による機能の違い（第二章）」、「歌による機能の違い（第三章）」という三つの視角から論じたものである。以下、各章の概略を記す。

第一章では、集中の「鳴く鳥」の歌と、鳥の歌人といわれる赤人の鳥の歌を考察した。

第一章第一節では、「鳴く鳥」を歌うことの意味を考えるため、「鳴く鳥」と物事の状態、物事に対する感情をあらわす語である形容詞とがかかわっている例（一〇九例）と、「鳴く鳥」に「聞け（か）ば」、「鳴け（か）ば」などの条件句が用いられている例を参考にしながら論を進めていった。その結果、集中の「鳴く鳥」は、話者と感情共有の可能な存在、待たれる存在として位置づけられ、「鳴く鳥」を歌うことは、その声を聞きたいとされるものであった。集中における「鳴く鳥」は、基本的に感情共有の可能な、無前提の信頼を置ける存在であった。

第二節では、叙景歌の典型的歌人といわれる赤人について、叙景歌と把握されることの多かった赤人の歌々の特質を考えた。集中において、実景（枕詞以外）の鳥を最も多く詠み、鳥の歌い方においても他の万葉歌人に比して特徴的である赤人は、叙景歌の代表作とされる九一九、九二四、九二五歌において、しきりに鳴く鳥を歌うことによって、行幸地を讃美したのであった。これらの三首が讃美の情を詠んだ抒情詩でありながら、叙景歌の代表作とされたのは、情を託されたその景の中心に鳥がおり、赤人の場合その鳥の表現が、『万葉集』の中で独自の位置を占めていたため、叙景歌として受け取られてしまったのであった。

第二章では、『万葉集』の中の雁と「タヅ」について論じた。

第二章第一節では、『万葉集』における雁の位置づけを試みた。雑歌と相聞の雁の例と、相聞には分類されていないものの、恋歌的に解釈できそうな雁の例の分析を通じて、雑歌において秋の景物としてのあり様が形成され、相聞においては恋歌に相応しくない鳥として認識されていた雁が、雁信の影響により、「雁の使い」に限っては恋歌の題材となっていることを明らかにした。そして、使いとなる鳥、恋の使いとなる鳥という日本古来の発想と、雁信の影響により、恋歌には適さない鳥であった雁が、恋歌において、使いとして詠まれるようになる様相を表現史として把握した。

第二節では、『万葉集』の「タヅ」は冬の鳥の「ツル」といわれ、季節外れの夏の「タヅ」とされた遣新羅使人歌群の「タヅ」について、集中の上位六位の鳥と季節との関係を考察することによって、集中における「タヅ」は「ツル」に限定できず、季節を担わない鳥として理解すべきことを論じた。そして、万葉歌における「タヅ」が、旅にあって家、妹を思う情と深くかかわる、いわば様式としての「タヅ」であることを明らかにした。

第三章では、歌作品における鳥の機能について考えてみた。

第三章第一節では、従来の研究では二十三首のうち、一七二、一八〇、一八二、一九二歌の四首に鳥が詠まれているとされる舎人慟傷歌群中の鳥について、一八二歌と一八七歌との対照性を検証することによって、一八七歌にも鳥が詠み込まれており、舎人慟傷歌群中の鳥の詠み込まれている歌は五首であることを明らかにした。そして、五首の鳥の歌は、作者である舎人たちの心情の変化に同期しつつその歌われ方が変化していき、呼びかける存在である舎人たちと呼びかけられる存在である鳥は同じ位相にあり、舎人慟傷歌群における鳥の機能は、この位相の同一性の具現にあることを確認した。

第二節では、泣血相哀慟歌において妻の声の比喻であり、「妻の幻影を追」（『全註釈』）う表現である「鳴く鳥の 声も聞こえず」が、集中の「鳴く鳥」の例に比して、極めて異質であることを見究めた。そして、この「鳴く鳥の 声の聞こえず」の表現が、妻の死を認めるしかない、あきらめざるを得ない表現として一首内において機能していることを探った。

補論では、万葉歌人の中で実景（枕詞ではない）の鳥を最も多く詠み、鳥の歌い方においても他の万葉歌人に比して特徴的である赤人の「神岳作歌」について、「ありつつも 止まず通はむ」空間と歌われる明日香の「旧き都」（A）と、その「旧き都」の美しい景が三つの対句によって描写されている（B）の部分が、旧都明日香を讃美する表現であることを、集中の新都を歌う歌と吉野、紀伊国行幸歌の例を参考にしながら論証した。そして、集中の「音+泣く」の例を考察することによって、（C）の「見るごとに 音のみし泣かゆ」が、（A）、（B）に対する悲傷の表現であることを確認した。と同時に「神岳作歌」は、このままずっと止まず通いたい美しい自然の明日香が、大君のいない「旧き都」であることを悲しむ歌であることを解明した。

以上のように、本論文は、『万葉集』に歌われている鳥について、鳴くことを歌う意味や歌作品内の表現、機能を考えることで、集中における鳥と、歌作品内の鳥の位置づけを明確にすることを目的とするものである。

学位論文審査結果の要旨

論文提出者指名 朴喜淑

論文題目 『万葉集』における鳥の表現とその機能

1 本論文の意義

本論文は、『万葉集』におけるさまざまな鳥の表現を取り上げ、それぞれの鳥の表現上の特質や、歌内部における機能について論じたものである。本論は六百例以上に及ぶ万葉歌の鳥の用例を細かに分析し、話者の心情と同期する鳥の鳴き声を論理的に説明する。そして、この点を論文全体の基盤としながら、代表的な鳥について論述する巨視的な視座に立つ論と、歌の解釈に関わる微視的な論を展開している。これまで、主観的に論じられる傾向が強かった万葉歌の鳥について、客観的な方法論に則り、新見をあらわした点に大きな意義がある。

2 本論文の総合評価

本論文は、研究テーマ、データ収集の徹底性、記述方法、研究結果のいずれにおいても以下に述べるように優れており、高く評価できる。

- (1) 研究テーマ：現存する日本最古の歌集である『万葉集』の鳥について論述する点において、研究テーマは十分に絞り込まれており、かつ、上代文学全体への目配りも合わせ持つという点において評価できる。
- (2) データ収集の徹底性：『万葉集』に歌われている鳥の全例について、分析を試みている点において、高く評価できる。
- (3) 記述方法：安易な作者論に陥ることなく、あくまでも歌表現として鳥を捉えようとする明確な方法論に基づき、記述されている。また、膨大な先行研究について調査が行われ、これまでの研究史を消化した上で、論が組み立てられている。
- (4) 研究結果：歌表現と歌作者とを切り離し、歌作品をそれ自体を閉じられた作品として読むという方法は、近年の万葉研究の一般的手法ではあるが、鳥という外的事象をどのようにして、歌が表現に取り込んでいるかという視点は、これまで漠然と把握されていた、鳥についての概念を

根底から覆す結果にもなっており、『万葉集』の鳥についての新しい見解を示している。

3 本論文の評価の詳細

3.1 「はじめに」に対する評価

「はじめに」では、本論の総括的な先行研究と、本論の立場、および、各章節の概略が述べられている。これによって、論文全体が見通せるようになっていることは評価できるが、研究目的・方法について、もう少し具体的な記述があれば、さらに有効であったと思われる。

3.2 「第一章 第一節 鳴く鳥」に対する評価

本節では、『万葉集』に歌われる鳥の多くが、その姿ではなく、声であることに着目し、その声と話者の心情とが同期する点を剔出する。この点をさらに確かめるべく、形容詞と鳥の声とがどのように関係するか、確定条件と鳥の声とがどのように関係するかについて、分析を加え、先に述べた同期について、さらに明確に述べている。鳥の用例全例から求心的に論が進められる点は説得的であり、高く評価できる。しかし、その一方において、形容詞や確定条件を論の補助線として使用する点についての方法論的背景が弱い点にやや不安を残す。

3.3 「第一章 第二節 叙景歌と鳥」に対する評価

アララギ派の歌人たちは、山部赤人の歌を「叙景歌」と評した。その後、「叙景歌」の定義が曖昧なためもあって、ことばだけが一人歩きし、「叙景歌」論は衰退した。本節では、赤人作に鳥の多いこと、かつ、他の万葉の鳥とは大きく質の異なる表現が存在することを確認、アララギ派の人々が「叙景歌」と称した赤人の特殊性を鳥の表現に見出した。アララギ派の人々の直感を論理化した本節は、「叙景歌」の内実に迫る点において、方法論的にも独自性が認められる。

3.4 「第二章 第一節 雁一秋と相聞一」に対する評価

本節は、万葉集に見える雁についての専論である。雁と同じように秋日本に飛来し、春に帰る渡り鳥である鴨との比較を通じて、鴨が相聞情調を色濃く反映した歌が多いのに対し、雁は秋の景物としての機能を果たしていることを論じる。またあわせて、鳥を使いに見立てる発想が日本に根生いのものであることを述べ、そうした発想が雁信の故事と合流することによって、秋の景物としての雁が恋の使いとしてのみ恋歌に詠われることを論じた。文学史的構想に基づいた本節は、万葉の雁の本質を捉えている。

3.5 「第二章 第二節 タヅ—遣新羅使人歌のタヅ—」に対する評価

万葉の「タヅ」は、鶴(つる)のことであり、冬に日本に飛来する渡り鳥であるという通説に対し、遣新羅使人歌群に五首歌われる夏の「タヅ」を手がかりに、「タヅ」は鶴に限らず、白い大型の鳥であることを十分な論拠を支えにしながら、論理的に証明した。また、その「タヅ」は旅中であって妹を思う機能を有しており、遣新羅使人歌の夏の「タヅ」もそうした歌の様式内に収まるものであ

ることを論じた。これまでの通説に対して真っ向から異を唱えた、万葉集研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。

3.6 「第三章 第一節 舎人慟傷歌群と鳥」に対する評価

日並皇子薨去の際、舎人たちが歌った二十三首の挽歌中、「つれもなき 佐田の岡辺に 帰り居ば 島の御橋に 誰か住まはむ」という一首がある。下線部は、「御橋に」、「住まふ」という表現に疑問が提示されながらも、その「住まふ」主体は舎人たち自身であると解釈された来だが、本節では、それを日並皇子が飼っていた「雁の子」であると論じた。一首の解釈も疎かにしない姿勢は高く評価されるものの、論証の論理構造に若干脆弱な面も見られる。しかし、通説の理解と比較すれば、この新解釈はより説得的である。

3.7 「第三章 第二節 泣血哀慟歌と鳥」に対する評価

人麻呂が妻を失った時の挽歌である「泣血哀慟歌」の「玉だすき 畝傍の山に 鳴く鳥の 声も 聞こえず」という一節から、「泣血哀慟歌」の鳥の機能を論じている。万葉集に見える鳥の歌の中で、「泣血哀慟歌」の鳥が異質であることは理解できるが、その本質把握という面においては、他の節に比べ、やや書き込み不足を感じざるを得ない。

3.8 「補論 赤人『神岳作歌』」に対する評価

赤人作歌の「鶴」の讚美性について論じるとともに、「神岳作歌」が王権の不在を嘆く明日香旧都歌であると述べる。本博士論文にあってはやや違和感が残るものの、作品把握として、旧都歌と荒都歌とを峻別する点は優れている。

4 今後の課題

今後は、本研究の方法に依拠した形で、他の鳥の表現についての分析を継続することが期待される。また、『万葉集』の鳥と、記紀に登場する鳥との間にはその種類の違いが指摘されており、その違いを含みこんだ、研究成果が期待される。

5 人間社会学研究科言語文化学専攻博士論文審査基準による評価

「人間社会学研究科言語文化学専攻博士論文審査基準」に示された以下の5項目のいずれについても、本論文は十分に該当すると認められる。

- 1) 研究テーマが絞り込まれている。
- 2) 研究の方法論が明確である。
- 3) 先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。
- 4) 結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。
- 5) 当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。

6 審査委員会の結論

本審査委員会は、全員一致で、申請者に対して博士（言語文化学）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。